

「交わり」を求めて

—『オハイオ州ワインズバーグ』
覚え書—

齋藤 忠利

人間とは、人の間と書く。従って、人間を人間たらしめるものは、人が人との間に生きること——お互いの人格的な交わりの中に生きること——に他ならない。人がこの「交わり」を失ったとき、人は人であって人でない。少くとも「人間」ではなくなるのである。もはや「人間」ではなくなった人は、グロテスクな存在である。シャーウッド・アンドラスン (Sherwood Anderson) が、その代表作『オハイオ州ワインズバーグ』 (Winesburg, Ohio) (一九一九年) で描いたのは、正に、そのようなグロテスクな存在の姿であった。

シンクレア・ルイス (Sinclair Lewis) の代表作『本町通り』 (Main Street) (一九二〇年) と共に、アメリカ小説にアルフレッド・ケイジンのいわゆる「新しいリアリズム」 (the new realism)⁽¹⁾ を持ち込んだ『オハイオ州ワインズバーグ』⁽²⁾ は、カール・ヴァン・ドールンによって「村落への反逆」⁽³⁾

九世紀後半のアメリカの村落の因襲に対する反逆」という範疇に入れられて以来、いろいろに読まれてきたが、この作品が、アメリカ小説史上にもっている歴史的な意義を別にして、現在の我々にも訴えるものを持っているのは、人間が「人間」たり得ないという現代の悲劇——人間疎外の問題——が、素朴な形ではあれ、すでにこの作品に於いて取りあげられているように思われるからである。

この作品に描かれている人物がグロテスクな存在であるのは、それぞれの人物が自己の「真実」に生きようとして、周囲の人々から誤解されてしまうためであり、これらの人物は、グロテスクな存在であるために「交わり」を求めてもそれが得られないのだ、と、この作品の序文「グロテスクな人々の書」は説明しようとしているが、この作品に納められている二十三の短篇を読んだ印象では、事實は、むしろ逆であって、十九世紀末のアメリカの典型的な田舎町ワインズバーグ——因みに、ワインズバーグは架空の町であるが、作品の上では、オハイオ州北部、エリー湖の南十八マイルに位置していることになっている、人口千八百の町——にも、すでに、現代の我々の深刻な問題たる人間疎外は始まっていて、「交わり」を失った人々は、もはや、「人間」であることが出来なくなり、グロテスクな存在になっている。そして、「交わり」を回復しようとする、この人々の試みは、これらの人々がグロテスクな存在であるために、ますますこれらの人々をグロテスクなものにしてしまう。人間疎外から救われたいという願いが、さらに深刻な人間疎外

を生む。このような、いわば二重の悲劇が、この作品に於いて語られているように思われるのである。そのところを、アーヴィング・ハウは、次のように書いている。

『オハイオ州ワインズバーグ』は、かくの如くにして、アメリカに於ける人間疎外の寓話、愛情の喪失をそのテーマとする寓話として読むことが出来る。この作品の主要な登場人物は、感情を養う基本的な栄養源から遠ざけられている。つまり、彼らは、そのなかに生活しながらも、もはや、それとは生きた関係をもてなくなっている自然から——彼らの横につらなりながら、彼らの独創力の不足をものはや満たすことのない、畠の肥沃さから——少くとも、アメリカの神話の主張するところによれば、かつては、人間お互いを友愛の精神で結びつけていた筈だが、今では、彼らの生活とはかけ離れた、一つの制度でしかない社会から——かつては、腕前のあるところを彼らに充分感じさせたが、今では、単なる重荷でしかない仕事から——そして、とりわけ悲劇的なことには、お互い同志から、遠ざけられていて、お互いが愛情を極度に必要としている、正にそのことが、その愛情を実際に手に入れる妨げになってしまっているのである。

ところで、「交わり」の回復を願うこれらグロテスクな人々が、いわば一種の救主として期待をかけている人物が、ワインズバーグのホテル「新ウィアード館」の経営者トム・ウィラー

ドの伴で、この町の新聞「ワインズバーグ・イーグル」紙の記者をしている青年ジョージ・ウィラーである。このジョージ・ウィラーは、作品『オハイオ州ワインズバーグ』を統一するという作品構成上の機能を果している人物であるが、この作品の二十三の短篇は、このジョージ・ウィラーがなんらかの形で関係する短篇群と、それ以外の傍系的な短篇群とに分けられよう。(もともと、この分け方は、あくまで便宜的なものであるが、ある短篇に於いて(たとえば「冒険」)ジョージ・ウィラーの名が一度だけ言及されているからといって、その短篇を前者の短篇群のなかに入れることは、いささか問題である。従って、一例としてあげた「冒険」は後者の傍系的な短篇群に入るべきものと考える。)

さて、このように分類した上で、二つの短篇群について、その特長を調べてみると、まず、後者の傍系的な短篇群では、人間疎外が生じていく事情、乃至は、人間疎外の犠牲者になってしまっている人々の生熊が、描かれているといえるようである。たとえば、「神信心」のジュシー・ベントリィは、ガメツさを伴った異常な信仰によって、人間疎外の犠牲者となり、「身をまかす」のルーイズは、「子供の頃からノイローゼ気味で、後年産業主義体制が、幾百人となくこの世に生み出すこととなる、過度に神経質な種類の女性の一人」(傍点は筆者)であった点に於いて、近代産業主義社会の人間疎外の初期の犠牲者であったといえないこともないし、「冒険」のアリス・ハインドマンは、一度肌を許した男に、その男に捨てられたのち

も操を守りつづけるという古風な貞操感のために、孤独な生活におちこんでいて、ある雨の降る夜、雨の中に裸でとび出す『冒険』をしたあと、「ワインズバーグの町ですら、多くの人が、ひとりで生き、ひとりで死んでいかなければならない事実」——ワインズバーグのような田舎町にも、人間疎外は始まっているのだ、という事実を、無理にも、いさぎよく認めようとするのである。

次に、前者の、ジョージ・ウィラードが関係をもつ短篇群では、人間疎外の犠牲者となった人々、つまり「交わり」を失った人々がジョージ・ウィラードを媒介として「交わり」を回復しようと求める姿が描かれている。たとえば、「手」のウィング・ビドルボームにとって、ジョージ・ウィラードは「それによって人間への愛を表現する手段」である。「手」は、たしかに、『オハイオ州ワインズバーグ』の冒頭を飾るのにふさわしい、すぐれた短篇であるが、「交わり」を求めるシンボルとして描かれているウィング・ビドルボームの『手』は、その象徴性があらわに目立ち過ぎるきらいがある。(象徴といえば、「孤独」のイーノク・ロビンソンが、電車にはねられて、びっこになっている。このことが、「交わり」をもてなくなっている人間、人生にうまく対処出来なくなっている人間のあり方を、それとなく、たくみに象徴しているように思われるが、どんなものであろうか。)また、「母親」のエリザベス・ウィラードは、ジョージ・ウィラードが、彼女が自らのなかで滅びるにまかせたものを生長させてくれるように思いこんで、息子のジョージ

がくだらない人間にならないように、守ってやることに生き甲斐を見出ししている。これら、ウィング・ビドルボーム、エリザベス・ウィラードの二人に限らず、ワインズバーグの町のグロテスクな人々は、ジョージ・ウィラードの中に、あるいは、ただ話を聞いてくれるだけの聞き手を、あるいは、自分の理解者を求めている。「哲学者」のパシヴァル医師は、自分の身に何事かが起つたら、この世の人はすべてキリストなのだ、という論旨の書物を、自分にかわって書きあげてくれるようにジョージに依頼する。「着想家」のジョウ・ウエリングは、頭の中に次から次へと湧いてくる思いつきを聞かせてはジョージを悩ます。「神の力」の牧師カーティス・ハートマンは、神が裸の女の姿をかりて自らをあらわした、とジョージのところへ知らせに来る。「教師」のケイト・スイフトは、かつては彼女の教え子だったジョージの中に男を感じ、男としてのジョージに愛されることによって自らの孤独を慰めたいと思いつつも、その教師意識から、ジョージに人生の扉を開いてやりたいという熱烈な欲望を抱き、ジョージに、作家になるつもりならば、言葉をもてあそんではいけない、と忠告する。「変り者」のエルマー・カウリイは、ワインズバーグの人々の考えを代表している(とエルマーは思いこんでいる)ジョージに、自分は「変り者」ではないのだということを、実に「変った」方法で理解させようとする。ともあれ、これらグロテスクな人々は、笑いの対象とされるにはあまりにみじめな人々であり、それぞれに同情されるべき人々である。そして、ジョージ・ウィラード自身

は、これらグロテスクな人々の「交わり」を回復しようとする悲願を託されて——もっとも、そのことをジョージの方ではつきり意識していたとは思えないが——ワインズバーグの町を出ていく。こうして、ジョージが町を出ていく姿を描く「出発」が、以上簡単に考察を加えてきた二つの短篇群をまとめて、作品『オハイオ州ワインズバーグ』を締め括っている。

「交わり」——それが、本当の意味で、人間を人間にする。これこそ『オハイオ州ワインズバーグ』が語ろうとしているテーマである。この作品にこれまで貼られてきたレッテル——「村落への反逆」、「中産階級のモラルの拒否」、「性の自由の宣言」等々——は、この作品に於ける「交わり」の回復を求める試みのそれぞれ一面を捉えたものに過ぎない。「交わり」は回復されるか。そもそも回復されるべき「交わり」が、かつて存在したことがあるのか。「交わり」は、むしろ、人間を本来に人間たらしめるために、これから作りあげられなければならないものではないのか。『オハイオ州ワインズバーグ』の語っていることは、「交わり」をもたないグロテスクな人々にとって、「交わり」を成立させることが、いかに困難であるか、ということである。しかし、この作品は、また、実に稀れではあるが、これらのグロテスクな人々の間にも「交わり」が成立した瞬間のあることを語っている。(たとえば、「云わずにすんだ嘘」のなかで、二人の作男は、一瞬間ではあるが、生きた「交

わり」のなかに入る。) マルコム・カウリが、一応条件をつけて述べている意見——『オハイオ州ワインズバーグ』は、「かつては、悲観的な作品、破壊的な作品、病的なほどに性的な作品であると攻撃されたが、そのような作品では決してなく、むしろ、愛の書、人と人とをへだてる壁をたたきこわそうとする試み、そして、この作品なりに、今では失われてしまっている、善意の時代に於ける田舎町の生活をほめたたえる書物である⁽⁸⁾」——は、充分な説得力をもっていると思われる。

(1) Cf. Alfred Kazin: *On Native Grounds*, pp. 205~

226

(2) Cf. Carl Van Doren: *The American Novel 1789—1939*, pp. 296~298

(3) Cf. S. Anderson: *Winesburg, Ohio (The Book of the Grotesque)*, pp. 11~12 (Penguin Books)

(4) Irving Howe: *Sherwood Anderson*, p. 101

(5) S. Anderson: *op. cit.*, p. 70

(6) *Ibidem*, p. 103

(7) *Ibidem*, p. 19

(8) Malcolm Cowley's *Introduction to Winesburg, Ohio* (Compass Books), p. 15.

(一橋大学講師)